

別化を図るために、十分な時間をとることになりますので、増単位をす  
るとか、あらかじめ教材等の精選を行うとかして、これに当てる時間を  
生み出すなどの工夫が必要になります。

(2) 習熟度別学級を編成する場合の例

この場合は、ある時点で、習熟度別学級A、Bなどを編成することにな  
りますが、この学級の編成に当たっては、事前に、生徒や父兄に、各学級  
での学習内容やその進め方の違いなどについてよく説明し、十分納得さ  
せた上で最終的には、生徒の希望によって学級を選択させるようにします。

この場合、教科によっては、学期の区切りごとなどでの生徒の学級間の  
移動はしないことも考えられます。なぜなら、教科によっては、学習内容  
もその進め方も違う学級の間での移動は無理なこともあり、無理を承知で移  
動させるよりは、むしろ、各学級ごとに、それぞれの目標に向かって努力  
させ、学級ごとに、レベルの向上をはかるべきだとも考えられるからです。

このように、学級間の移動のない場合の評価、評定は、各学級ごとに独  
自に行うこととなりますから、各学級内での評価、評定の仕方には、1の場  
合の評価、評定の仕方が参考になると思います。

これに対して、学期の区切りごとなどで、生徒の学級間の移動を考える  
場合、評価の仕方については、各学級ともに1の評価の仕方が参考になる  
と思いますが、最終的な学年末の評定の仕方については、新たに考えなけ  
ればなりません。これは、実際に大変難しい問題ですので、十分検討し、  
実態に応じた、評定に関する内規を作らなければなりません。